

平成30年2月21日

## 第2回「文化首都・京都」推進本部会議 市長訓示

文化庁が機能強化して、京都に全面的に移転する。その準備がいよいよ加速されてきた。この京都への全面的な移転に向け、「新・文化庁」にふさわしい組織改革、機能強化を図り、文化に関する施策を総合的に推進するための、文部科学省設置法改正案が、現在国会で議論されている。昨年6月には、文化政策の対象領域を拡大する「文化芸術基本法」が施行された。この新たな法律には、日本の文化の強み、京都の強みでもある生活文化が掲げられ、その具体例として、茶道、華道をはじめ、新たに「食文化」がしっかりと明記された。京都が大切に引き継いできた、暮らしの文化が、新たな法律に明記されている。地域の文化資源を活かした経済活性化など新たな文化政策への大胆な転換が図られているところであり、文化による日本の地方創生の取組が動き出そうとしている。そのモデルを京都から発信していきたいと考えている。

先日、7回目を迎えた京都マラソン。世界45の国と地域から2千百人を含む約1万6千人のランナーをお迎えし、京都が持つ文化力によるおもてなしをはじめ、共生社会に向けた取組、環境問題と伝統産業を結び付けたメダル制作など、京都の強みを最大限に活かし、感動の和が広がっていることを実感した文化首都・京都のマラソン大会であった。ボランティアをはじめ、本当に多くの方々に支えられ、京都の伝統、文化、地域力、そして、京都市民が大切にしている暮らしの美学、生き方の哲学というものが、隅々に活かされていた。車いす競技、京都大学iPS細胞研究所の山中教授とリオデジャネイロ・パラリンピックの女子マラソン（視覚障害）銀メダリストの道下さんとのペア駅伝、沖縄から両足義足のランナー島袋さんも走っていただいた。まさに共生社会を目指したマラソンであります。また、「お茶席がある」、「お坊さんが法螺貝を吹いて応援してくれる」、「世界で京都だけではないか」との声も参加者からいただいた。市民の皆様やボランティアの方々の奉仕の心、地域の絆、多世代交流、ランナーに提供される八つ橋、京野菜など京都の食文化、芸妓さん、舞妓さんのお迎え。ランナーにも芸妓さんがいる。京都の強みが見事に活かされている。だから人に感動を与える。走りながら京都の歴史、文化、地域力、都市が大事にしているコンセプト、これらを実感できる。こういうマラソンに発展してきた。これは見事である。これをどう進化させ、伝統産業、生活文化など総合的に繋げていくのか。また、これを「文化首都・京都」、「世界文化自由都市」にどう繋いで、さらに深堀して、どう発展させていくのが重要である。京都の強みを活かした時に、また新たな発展があると考えている。

昨年4月に、この「文化首都・京都」推進本部を発足させた。全職員にそれぞれの「仕事×文化」として、深堀して取り組んでほしいとお願いした。それ以後、とりわけ嬉しいのは、若い職員の方が頑張ってくれているとの声を聞く。これが一番大事。どんどんボトムアップで、同時に局長、区長等が英知を集めて、若い職員を鼓舞して、市民とより密接に結び付いた取組をお願いしたい。

来年度は、世界文化自由都市宣言40周年事業に関連して、優れた文学作品を顕彰する新たな文学賞の創設を検討している。これは、文学との結びつきを強めることで、京都の歴史と魅力の再認識に繋げようとするもので、早々に有識者会議を立ち上げ、幅広い英知を集めて取り組んでいきたい。

また来年度から、中央卸売市場第一市場と第二市場の再整備を始める。京都中央卸売市場には、

平成30年2月21日

全国で唯一、近郊野菜専門のセリ場を備え、京野菜のブランド化に貢献するなど、生産者との太い絆があり、世界に誇る京都の食文化を支える拠点である。今後、食文化と農業・水産業をさらに結び付けていく取組をお願いしたい。

あらゆる政策を文化という視点でブラッシュアップしてほしい。そうした時に、徹底して市民参加、市民との協働、これを意識してほしい。

そこで、3点お願いします。

**1点目は、文化による『新たな経済的価値の創出』であります。**

経済との結び付きを意識してほしい。市民生活の豊かさ、そのことが同時に新たな文化を創造していく。そうした経済と文化を繋ぐことによって新たな価値を創造し、それをまちの発展、市民の豊かさ、また文化、芸術に関わる方の生活の安定、後継者、担い手の育成、こうしたことにしっかりと繋いでいかなければならない。生活文化、地域社会の中に、京都の強みである文化がどう活かされ、そのことが京都の経済の発展にどう繋がっていくのか。このような視点を持って仕事に取り組んでいただきたい。中でも一番目指すべきは観光であります。働き方改革の課題についても、文化の視点をしっかりと位置付けてほしいと思います。

**2点目は、『地域共生社会の実現』であります。**

京都マラソンでも様々な障害のある方に参加いただいているが、福祉と文化、社会包摂と文化、そうしたことをしっかりと取り組んでいただきたい。また、あらゆる地域社会との共生という時に、地域のコミュニティの活性化のために、区役所が果たしていただくべき役割は非常に重要であります。区役所は様々な仕事の最前線であり、全局において、区役所との連携をより強めてほしい。その時には、社会的弱者、LGBT、あるいはSDGs、こうした視点もしっかりと押さえてほしい。

**3点目は、『都市間文化交流の更なる発展』であります。**

文化庁が京都に移転してきて良かったと、全国の方々に実感していただくこと。同時に、より世界から尊敬される日本にしていく。そのことが、日本の、京都の都市格の向上に繋がる。このような循環が極めて大事である。それが世界文化自由都市の姿である。あらゆる視点での取組をお願いしたい。

結びになりますが、明治150年の取組がスタートしている。150年前、人口の3分の1が減り、まちが半分焼けた状況で、地域住民が参画して学校を創った。明治の先人は、京都のまちの100年後、200年後展望し、学校だけでなく、琵琶湖疏水をつくり、鉄道を走らせた。そのような先人の努力に想いを馳せ、我々は知恵を絞って、未来に責任を持った仕事をしていかなければならない。そういう意味での、明治150年の事業にしていきたい。もう一度、原点をしっかりと抑えていただきたい。

また、二条城を中心に、大政奉還150周年記念事業で様々な取組をしてきたが、22都市を巡るスタンプラリーへの応募者が2千人を超え、22箇所を制覇された方が418名もいた。凄いことであります。このような事例をしっかりと生かして、全国と繋がり、そして世界と繋がり、同時に、未来と繋げてほしい。

引き続き、全庁を挙げて取り組んでいきたいと思っております。よろしく申し上げます。